

茉莉園詩派における茉莉花と「茉莉花」詩について

— 森春濤・森槐南とその周邊 —

安原 大熙

はじめに

幕末明治期の漢詩人森春濤（一八一九—八九）は、明治初期の漢詩壇に清詩の清新な風趣を導入し、一世を風靡したことで知られている^①。

特に、彼やその弟子が『新文詩』『花月新誌』をはじめとする詩文雑誌上において竹枝などの艶詩を盛んに創作したことは、森鷗外が小説『雁』の第壹章において「併しまだ新しい小説や脚本は出てゐぬし、抒情詩では子規の俳句や、鐵幹の歌の生れぬ先であつたから、誰でも唐紙に摺つた花月新誌や白紙に摺つた桂林一枝のやうな雑誌を読んで、槐南、夢香なんぞの香奩體の詩を最も氣の利いた物だと思ふ位の事であつた^②。僕も花月新誌の愛讀者であつたから、記憶してゐる。」と言及していることから分かるように、次世代を擔う青少年にも廣く認知された。また森春濤は、その餘りに艶冶な詩風によつて同時代の漢詩人から「詩魔」と揶揄されるほどであつたが、このことも彼の惹き起こした艶詩の流行が、印象的であつたことを示す證左となろう。

このように、黎明期の明治社會において特異的な存在であつた森春濤の艶詩は、近年の學界において注目を集めており、例えば日野俊彦

『森春濤の基礎的研究』（汲古書院、二〇一三年）、合山林太郎『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』（和泉書院、二〇一四年）、陳文佳『森春濤的香奩詩受容與漢詩創作』（華東師範大學出版社、二〇一九年）のように彼の作品をテーマとした論群は陸續と出現している。しかしながら、韓偓・陳碧城の香奩體や、王漁洋の神韻說など、近世以前の中國古典詩から森春濤は如何なるポエジーを受容したのかという角度から分析した研究は多く存在するものの、彼が次世代の漢詩人・文學者に與えた影響に關する考察については未だ十分とは言えず^③、考證の餘地があると思われる。

江戸時代以前の艶文學——森春濤の一派が創作した艶詩も、基本的にはこの系譜を繼承する——と近代戀愛文學を繋ぐトンネルが何處に有るのかという話題について、齋藤希史『漢文脈と近代日本』は「情」という主題において、この二者が交錯していることを論じている。では具體的には、江戸時代以前、もしくはその系譜を引き繼いでいる明治初期・中期の艶文學の、如何なる要素が近代戀愛文學——より敷衍して解釋するならば、近代浪漫主義文學の世界と換言しても良いだろう——へと繼承されたのかという問題について考える時に、その答えは決し

て一つではなく、複数想定されうるだろう。

そこで本稿においては、今述べたような視野、展望のもとに議論を展開しつつ、森春濤の一派の作品の中で茉莉花を詠じた詩に着目することで、この問いへの新たな手がかりを示したい。先行研究においてはこれまで殆ど觸れられて来なかつたが、彼が明治八年（一八七五年）に創設した「茉莉吟社」に参加した詩人の詩においては、茉莉花を詠じた詩が度々目に留まる。

一例を挙げると、森春濤の弟子の丹羽花南に「晚涼戲詠」（『新文詩』第十集に所収）という七言絶句がある。

1 晚涼如水洗炎塵、2 茉莉一株香可親。
3 參透滿庭秋氣味、4 此花的是我前身。

晚涼水のごとくして炎塵を洗ひ、茉莉の一株香親しむべし。參透す 滿庭 秋氣の味、此の花^{あき}的らかに是れ我が前身。

この絶句に鈴木魯（夢處）は「艶清可妬（艶清妬むべし）」と評を附しているが、このように森春濤の一派における茉莉花の詩は、艶的ニュアンスを伴って詠まれることが屢々あつた。

そして、森槐南は『新文詩』の後繼雜誌である『新新文詩』第六集の「詩話」において、

所謂庸音雜奏之時。是我茉莉園詩派之所以不得不專標舉清新。

いはゆる庸音雜奏の時。是れ我が茉莉園詩派の清新を標舉するを専らにせざるを得ざる所以なり。

と、茉莉吟社を據點とする自分の詩派を「茉莉園詩派」^③と表現している。このことから、「茉莉」というタームが彼らにとって重要な意味を有することは明らかだろう。

本稿の第一節「茉莉凹巷處に關する考察及び『茉莉花』詩の分析」

茉莉園詩派における茉莉花と「茉莉花」詩について

においては、まず森春濤の上京後の寓居「茉莉凹巷處」が置かれていた環境について考察した上で、茉莉園詩派の人間にとって「茉莉」というタームが具體的にどのような意義を有していたのか？という問題に關して、『茉莉花』詩の分析を手掛かりに考察を行う。第二節「茉莉園詩派における『茉莉花』詩及び茉莉花の存在に關する考察」においては、茉莉園詩派内において艶的ニュアンスを伴っていた「茉莉花」詩及び茉莉花の存在は、近代という時代、東京という空間において如何なる意義を有していたのかという問題について、①茉莉園詩派の外部に居た人びとの視點や、②「支那趣味」を共有する當時の文人間で愛好されていた明清由來の文人文化、③明代の庭園理論まで幅廣く俯瞰した上で、論を展開する。茉莉花の表象を浮彫にする過程で、森春濤及びその後繼者の「茉莉花」詩から醸し出された艶的な世界が、その後の近代浪漫主義的な世界の形成にどのような作用を及ぼしたのか、という問題について考察してみたい。

第一節 茉莉凹巷處に關する考察及び

「茉莉花」詩の分析

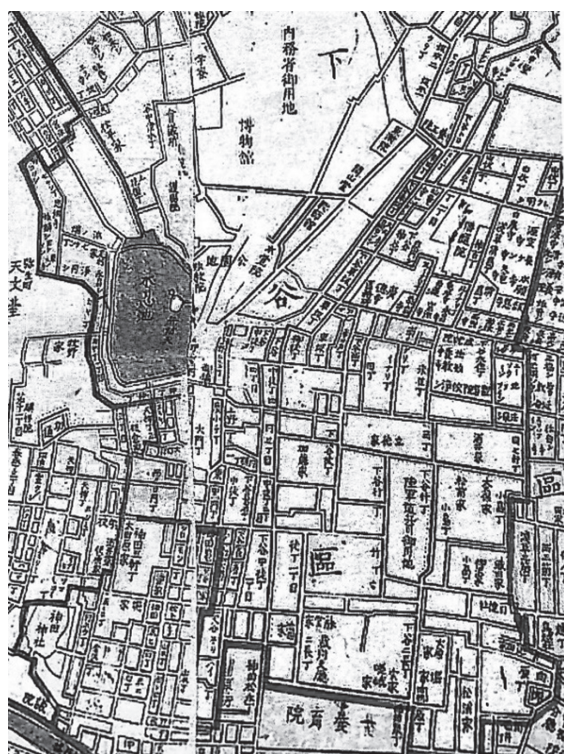
明治七年（一八七四）十月十五日、森春濤は息子森槐南と妻の伊藤織緒を伴って、それまで活動の據點としていた岐阜を出立して同月二十七日に東京に到着した。前田愛『枕山と春濤 明治初年の漢詩壇』によると、上京當初は、門弟永坂石埭が用意した下谷三枚橋ほとりの住居に入ったようだが、翌明治八年（一八七五）の初春のころ、下谷摩利支天横丁の新屋「茉莉凹巷處」に新たに居を構えたようである。彼はこの地において、茉莉吟社を設立した。

『新文詩』の奥付を確認すると、茉莉凹巷處は三たび轉じていたこ

とが分かる。『新文詩』第一集、第三十三集までは「東京下谷仲御徒町三丁目三十二番地」とあるが、第三十四集、第四十二集には「東京下谷仲御徒町三丁目七十一番地東側」とあり、第四十三集以降は「東京下谷仲御徒町三丁目二十六番地東側」と表記されている。ここから、茉莉凹巷處は幾度か場所を移しながらも、「下谷仲御徒町三丁目」の内部に位置していたことが分かる。

では、森春濤の新宅の周邊はどのような環境であつたのだろうか。明治期の下谷廣小路を回憶している内田魯庵「下谷廣小路」によると、「仲町と對した東側の六阿彌陀、今の瓦煎餅の角を折れた通りを摩利支天横丁と呼んだ。昔は水天宮金毘羅に匹敵する御利益の顯著な神で、月々の御縁日は盛つたもんだつた。」とあり、書店も多く賑やかな門前町であつたことが分かる。また、「此の摩利支天横丁からお徒士町へ抜けるあたりに明治の詩壇の星宿たる槐南の先人春濤翁の家塾があつた。(中略)春濤翁が存生時代、槐南はマダ十四五の弱冠で、摩利支天横丁の麒麟兒として詩壇の老宿達に舌を卷かした。」と、森春濤・槐南に關する言及もある。

その他には、後藤利光『森春濤詩抄』⁽¹³⁾の「森春濤略傳」は、茉莉吟社創設に觸れて以下のように記している。「下谷吟社を開いていた大沼枕山の家に近い下谷御徒町三丁目、俗稱摩利支天横丁角に居をかまえた。上野山の麓、不忍池に近く、幽寂でもあり、繁華でもあり、春濤意中の佳郷であつた。上野の松阪屋に近いところである。摩利支天の名をとつて、茉莉凹巷處と稱し、茉莉吟社を開いた。」これらの記述から、茉莉凹巷處は喧騒に包まれている摩利支天横丁の市街より、微妙に距たりのある幽靜の地に在り、詩作には充分適した環境であつたことが諒解されるだろう。(參考までに、當時の「下谷仲御徒町三丁目」



(圖一…荒井喜三郎編輯『東京市街細見圖』⁽¹⁴⁾)

周邊の地圖を附しておく(圖一)。

では、茉莉凹巷處には、何故建造された時點から「茉莉」の名が含まれていたのだろうか。從來の森春濤に關する文獻では、徳大寺に祀られていた摩利支天と縁の深い茉莉夫人より名を取つたことが由來だろう、と指摘しているものが多い。現に、茉莉凹巷處の名の由來について、森春濤自身が「摩利天の鬼子母が茉莉夫人、即ち波斯匿王の次妃です。鬼子母神とはつまり茉莉夫人です。」と筆記していることか

らも、そのこと自体は紛れもない事実だろう。

また、茉莉凹巷處が築かれる以前の作品ではあるが、「茉莉祠下作」〔春濤詩鈔〕卷十二に所収〕という、在りし日の茉莉夫人の美麗を稱えつつ、徳大寺近邊の風光を幻想的に詠じた七言律詩がある。その尾聯は

7 也似波斯開晚市、8 奈花香散嫵涼前。

也た似たり波斯晚市を開くに、奈花の香は散ず嫵涼の前。

となつており、茉莉花が散る様子と茉莉夫人のあでやかな姿態を掛け合わせている。ここから、茉莉園詩派において艷詩として茉莉花が詠まれた現象の源流として、この茉莉夫人の存在を想定することも、不可能ではないだろう。

これらの事例から、徳大寺に祀られていた摩利支天と縁の深い茉莉夫人より、名を取ったことが茉莉凹巷處の名づけの一要因であると言えよう。しかしながら、次に挙げる詩の用例から分かるように、茉莉園詩派にとつて「茉莉」というターム、茉莉花の存在はより重要なものであった。

○

茉莉凹巷處の内景―特に庭園―は如何なる様相であつたのだろうか。以下、茉莉凹巷處に關連する詩に着目することで考察を試みてみたい。『新文詩』第三十六集には、「題春濤森翁新居」という詩群があり、松原竹秋ら四名が韻を次いでいる。その内、春濤の門弟である岩溪裳川の七言律詩「題春濤森翁新居」を挙げよう。

1 先生笑倚著書樓、2 健筆何曾倦唱酬、
3 投老江湖仍淡蕩、
4 寄情花月太風流。5 芭蕉展綠春多雨、6 茉莉吹香夏似秋。
7 遮莫客談人世事、8 杯中有酒不知愁。

茉莉園詩派における茉莉花と「茉莉花」詩について

先生笑つて倚る著書の樓、健筆何ぞ曾て唱酬を倦まん。老を江湖に投ずること仍ほ淡蕩、情を花月に寄すること太だ風流。芭蕉は綠を展ばして春雨多く、茉莉は香を吹きて夏秋に似たり。
さもあらはれ
遮莫客は人世の事を談ずるを、杯中酒有れば愁を知らず。

草木類に着目すると、頸聯に「芭蕉」と「茉莉」の二種が登場する。茉莉花は「香り」を伴つて描寫されており、今季節は夏であるのにあたかも秋のようである、とも表現されている。茉莉花の香りは苑中に満ち、清涼感を感じさせるものであつたのだろう。

また、森槐南の「夏初茉莉園新居即事」〔槐南集〕卷五に所収〕という七言律詩二首に着目すると、其一の結句には「澹紅芍藥護茶廳（淡紅の芍藥茶廳を護る）」とあり、芍藥の花が登場する。そして其二の首聯・頷聯は、

1 主客圖成覓句忙、2 當門山影碧鬟涼。

3 新詩儘有燕脂氣、4 舊夢無非茉莉香。

主客圖成りて句を覓むること忙しく、門に當たる山影 碧鬟涼し。新詩 儘く有り燕脂の氣、舊夢 茉莉の香に非ざるは無し。となつており、涼やかで艷的な情景の中に「茉莉香」が位置付けられている。

これらの用例から、茉莉凹巷處の庭園には様々な草木類が植えられ、爛漫たる景であつたことが分かる。そしてその中でも、茉莉花は清冽な香りを放ち、特異な存在感を有していたことは、想像に難くない。ただ、轉居を扱つた詩以外に視野を擴げると、茉莉園詩派における茉莉花は實在の茉莉花としてのみ捉えられていた譯でもない、と考えられる。例えば、森春濤に「茉莉」〔春濤詩鈔〕卷九に所収〕という七言絶句がある。

1 一絲香迸小房櫳、2 盈掬新涼不是風。
3 月透羅幃人在夢、4 玉釵嬌顫雪玲瓏。

一絲の香は迸る小房櫳、盈掬すれば新涼是れ風ならず。月は羅幃に透けて人は夢に在り、玉釵嬌顫雪玲瓏^⑩。

この作品において、茉莉花は實在物として捉えることもできれば、あくまで題詠のモチーフとして捉えることもできる。

また、「謝杉山三郊送牽牛花（杉山三郊の牽牛花を送るに謝す）」（『槐南集』卷七に所収）という七言古詩には、

21 我家茉莉元更香、22 鬢霧橫陳嬌半牀。

我が家の茉莉元更に香し、鬢霧は横陳して半牀を嬌にす。

という聯があり、特に「鬢霧は横陳して半牀を嬌にす」という句から、この描寫には暗喩的に、エロティックな意味も込められていることが諒解されよう。

このように、茉莉園詩派における茉莉花は、實際に茉莉凹巷處の庭園に植栽されている實在物として認識されていただけではなく、詩社のシンボル、そして艶的なイメージを喚起する幻想的な植物としても認識されていた、と捉えることができるだろう。即ち、茉莉園詩派における「茉莉」というターム、そして茉莉花の存在に託されていたニュアンスは、單純なものではなかったのである。

第二節 茉莉園詩派における「茉莉花」詩 及び茉莉花の存在に關する考察

ここまでは「茉莉花」詩自體の分析を中心に据えて議論を展開してきたが、本章では「茉莉園詩派内において艶的なニュアンスを伴っていた「茉莉花」詩及び茉莉花の存在は、近代という時代、東京という空

間において如何なる意義を有していたのか」という問題について、「茉莉花」詩のみならず、茉莉園詩派の外部に居た人びとの視點や、當時の文人の營み、明代の庭園まで幅廣く俯瞰した上で、詳考していきたい。

（一）考察①—外部者の視點に着目して—

茉莉園詩派の茉莉花の實像を、外部者の視點を通じて明らかにしていく上で、先ずは正岡子規「庭^⑫」という明治後期に書かれた隨筆を參照したい。この小文には、彼の庭園に對する見識が詳述されているが、その中で當時の歌人、俳人、漢詩人が一般的にどのような庭園を構築していたのか、というテーマについて見解を述べている。その「漢詩人の庭園」を題材とした文中箇所を、以下に抜粹する。

「それから詩人の庭といふのは、歌人的のしまりの無いやうな、骨の無いやうな庭も嫌ひ、又俳人的の小規模で却て混雜したやうな庭も嫌ひ、庭全體の結構は人々によつて色々に注文があらうが、要するに漢詩の臭味を現はさうとするのであるから、彼等の庭には是非とも必要な草木がある。それは、梅と竹と芭蕉などで、盆栽なら蘭や茉莉の舶來品を喜ぶ^⑬といふ次第である。」

ここで、漢詩人にとって「是非とも必要な草木」の一つに、茉莉花が挙げられているのである。「盆栽なら」とあるが、例えば『新文詩』第十九集に鈴木蓼處「盆花二詠」という茉莉・素馨を詠じた七言絶句があることから、この當時は茉莉花を盆栽として鑑賞することが一般的であつたのだろう。また「舶來品を喜ぶ」とあるが、『新新文詩』

第五集に關澤霞庵「茉莉花」という、茉莉花が閩（福建省の古名）の山で咲き亂れ、それを南方の美人が摘むというエキゾティシズムが凝縮された内容の五言古詩がある。ここから、當時の漢詩人はあくまで大陸とは遠く離れた日本の地から、中國に對する憧憬の念を抱いて、大陸から輸入された茉莉花を賞愛していたのではないかと、推測することができる。

次に、『新文詩』に對抗して創刊された、幕末の遺臣成島柳北の『花月新誌』には、秋野千種「園中草木譜」^②という小文が掲載されている。以下に抜粹する。

「栗野ノ隱居ガ菊ヲ愛スレバ隣家ノ少年モ菊ヲ愛シ濂溪ノ學者ガ蓮ヲ愛スレバ近所ノ書生モ蓮ヲ愛ス況ヤ貴顯富豪ノ愛スル草木ヲヤ薔薇ハ開化ノ色有リト唱ヘ茉莉ハ文雅ノ香有リト叫ビ長官之ヲ愛スレバ闔局ノ髭參短薄盡ク之ヲ買ヒ之ヲ玩ブヨリ施イテ江湖ニ及ブ近來盆栽ノ盛ナル眞二人ヲシテ吃驚セシム（後略）」

「長官」が具體的に誰を指すかは不明であるが、茉莉園詩派の詩人たちが舊幕府の遺老よりも、寧ろ伊藤博文、山縣有朋など新政府の顯官と活發に交流し、眷顧を得ていたこと、そしてそれが一定の反感を招いていたことを考慮すれば、暗に森春濤・森槐南及び彼らと刺を通じていた官憲を指していると推測しても、無理はないだろう。

以上の事例から、彼らの同人意識は茉莉巷凹處の庭園に實際に存在していた茉莉花を中心としており、またその茉莉花を媒介として、中國趣味への耽溺も表向きにアピールされていたことが分かるだろう。一方で、その裏には同時に政治的なものも潜んでいた、ということも

言えるかもしれない。

（二）考察②―明清由來の文人文化に着目して―

前項は、茉莉園詩派の政治性に言及して擲筆したが、そのテーマに關して福井辰彦「明治漢詩と王士禎―「新文詩」所收作品から―」^③は参考になるだろう。この論文は、王士禎風の詩が『新文詩』周邊の詩人たちの間で流行したことを主に論じているが、その流行の背景について、

「溫雅で、言外の味わいを持つ〈王士禎風〉が、『新文詩』の詩人たちの間で流行したことには必然性があつたと考える。彼らの多くは明治新政府の高官であつた。幕末・維新の動亂を経て、なお盤石とは言い難い新政府での政務に迫られる彼らにとつて、詩は餘技であり、雅の世界へ精神を遊ばせる營爲であつたと推察される。そのような人々にとつて、右のような効果を持つ〈王士禎風〉の手法は好ましいものであつたに違いない。」

と言及している。

ここから、政治性と表裏一體ではあるが、當時の明治新政府の高官が「雅の世界」へ遊ぶための仙窟としても、茉莉凹巷處は機能していただろうことが推察される。第一節において、茉莉凹巷處が市街の喧騒から適度に離れた、幽邃な土地に位置していたことを指摘したが、そのこととこの問題は奇妙に關連しているのかもしれない。

そこで本考察においては、士大夫が憩う仙窟としての茉莉凹巷處に着目することで、茉莉園詩派における茉莉花の存在及び「茉莉花」詩

の有する多面性について、より解像度を上げることが目標とする。

○ 「上野」や「百花園」など、江戸明治の漢詩壇を回憶する内容の作品を複数遺している永井荷風は、「現代と支那趣味²⁸」という隨筆において、次のように述べている。

「又庭園にしても、支那風の庭が我が日本に中々ある。私の父なども、自分で支那の詩集などを讀んでその中の大抵な草木は集めて、さうして自分の想像で支那風の庭を造られたものである。（中略）私は庭のことなど餘りよくは知らないが、芭蕉や木槿、ざくろ、蠟梅、茉莉の如き花卉は支那趣味の庭園に必ず用ゐられるもので、日本の庭園としては昔の武家風の庭にも用ゐられず又茶人の庭にも植ゑられないものである。（中略）當時で支那趣味の大家と云へば、嘗て神田のお玉ヶ池に住んで居られた永坂石埭翁であらう。翁は支那に行かれたことはないのであるが支那の詩文を深く愛して、その愛讀した明清の書物の上に現はれた所に依つてその書齋と客間を總べて支那風に造られたのであつた。」

傍線部における「私の父」とは、筆者永井荷風の父、永井禾原を指す。彼は森春濤の門弟であり、漢詩人として名を馳せた。一九一三年に『來青閣集』という別集を出したが、そこに「花月會席上分韻得歌賦此送坪井咬菜（孝）游越後其二（花月會の席上にて分韻し、歌を得たり。此を賦して坪井咬菜（孝）の越後に遊ぶに送る 其二）」（『來青閣集』卷五に所収）という七言絶句がある。以下に引用すると、

1 森髯去後幾年過、2 七十二稿新柳多。

3 白髮尊前誰話舊、4 銷魂猶賸竹枝歌。

森髯去りて後幾年か過ぐ、七十二稿新柳多し。白髮尊前誰か舊を話さん、銷魂猶ほ賸す竹枝の歌²⁹。

となっている。『來青閣集』には、この他にも茉莉園詩派の最盛期を追憶している作品が隨所に見られる。

議論を『現代と支那趣味』に戻そう。この文章において、支那趣味の庭園に植ゑられる草木類として「芭蕉や木槿、ざくろ、蠟梅、茉莉」が挙げられていることは、先述した正岡子規の『庭』の記述と合致するところがある。そして、森春濤の高弟であり、書畫も能くした永坂石埭の詩書畫や、その趣向については井谷五雲『永坂石埭―その文人的素顔³⁰』に詳しい。この文獻に據ると、彼は明治初年に郷里名古屋より上京し、梁川星巖の舊趾に偶然的に住むこととなったようである。その後自邸を玉池仙館と名付け、祭詩龕、星舫、壽蓬という純中國風の建物を三棟建てたとある。その中國趣向は、庭園の竹樹泉石を中國の様式に従つて配置し、舶來品の椅子や卓を祭詩龕に置き、また瓦なども總て中國式にするなどの徹底ぶりであつた。

このことを念頭に置くと、『現代と支那趣味』の「その愛讀した明清の書物の上に現はれた所に依つてその書齋と客間を總べて支那風に造られたのであつた。」という記述は重要性を増してくる。彼らは、中國的な空間としての書齋や庭園を愛好しただけではなく、都市の中における書齋や庭園のあり方もまた、明清の文人に倣おうとしたのではないだろうか。そして、その営みの解析を通して、茉莉園詩派の詩人たちの茉莉花に對する愛好や、茉莉巷四處に對する認識の構造を、近代都市と化しつつあつた明治東京と關連させてモデル化できないだろうか。

當時の東京の文人間において流行した文化の内、明清文化由來のものとして先ず注目されうるものとして、煎茶會が擧げられるだろう。

明治期の煎茶の流行については長谷川瀟々居『煎茶志』に詳述されているが、その記述を参照すると、明治期の煎茶趣味は、基本的には江戸期の煎茶趣味の延長線上にあつたようである。しかしながら主な擔い手が社會の被支配層から、上層の權力支配層に變化したことが大きな變化としてあり、また煎茶席に懸けられる書畫には邦人の作品も含まれていたものの、明清文人の作品の方がスタンダードだったようである。上層の權力支配層が擔い手となったことは、第一節で述べた森春濤・森槐南と政治權力の繋がりにも間接的に關連するだろう。

また、納屋嘉人『近代文人のいとなみ』第一章「近代文人と集いの場」にも、明治期の煎茶會に關して次のような言及がある。

「また、明清を中心とする中國の書畫も煎茶會が受容の窓口となつて鑑賞の體系を築いていた。ことに、維新後、大陸の情報が容易に得られるようになったことで、文人たちの中國趣味はその直接的な影響を受けて幕末以上に盛り上がった。展觀席の主役は、文人たちの所藏する中國の書畫であり、これらの鑑賞がやがて彼らの書畫に結實していったのである。」

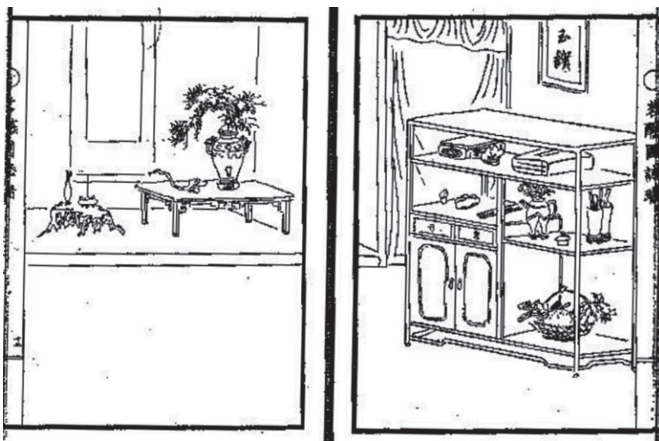
これらの記述から、當時の煎茶席の一つ一つの文物に「中國趣味」が反映されており、その珍品の數々に文人サークルの構成員は刺激されていたことが分かる。また、少なくとも書畫においては、愛玩の對象のみならず彼らのインスピレーションに轉化されていたとも言えよう。

茉莉園詩派における茉莉花と「茉莉花」詩について

このように「中國趣味」を攝取するトポスとしての一面も有していた煎茶會には、席の終了後に「茗讌圖錄」という記念誌が作成されることが恆例であつた。そこに擧げられた文品を閲してみると、茉莉花の名が散見されるのである。一例を擧げると、山中吉郎兵衛編『青灣茗讌圖誌瑞』（二八七六年）には、第二席（茗主・巖々洞蘆江）の「文房品目」一覽の「盆栽」

の欄に「白磁方盆植茉莉花（白磁方盆に茉莉花を植う）」とある（圖二）。

異國文化の雅趣を感じさせる文物を提供し、また攝取するトポスであつた煎茶席において、茉莉花が白磁の盆に植栽されていた事實は看過できないだろう。そして、たとえば森春濤の上京以前からの門弟である、神波即山に「甲申清明後一日赴墨水茗讌口占一律似同游諸子（甲申清明後一日、墨水の茗讌に赴く。口占一律。同游の諸子に似す）」（『新



（圖二）茉莉花が生けられた煎茶席（『青灣茗讌圖誌瑞』より引用）

文詩別集』五に所收」という七言律詩があることから分かるように、當時盛況であつた煎茶會には茉莉園詩派の漢詩人も善く参加していたのである。これらの事例から、茉莉園詩派の詩人の茉莉花に對する意識と、明清の文品を主役とする煎茶會は、中國趣味の精神及び、實在物としての茉莉花に對する愛好精神において通底していたと、考えられないだろうか。

また、當時文人に鑑賞された書畫にも、茉莉花が描かれたものが散見される。その一例として、本稿では渡邊小華畫、岡本黃石題詩の「花卉帖」を挙げよう。

「花卉帖」に關する詳細な解説は池澤一郎「日本近世近代の題畫文學の魅力―文人四君子を例に―」に既になされているので本稿では簡易なものに留めるが、左右見開きの構成となっており、左に十二の花の岡本黃石による題詩、右に對應する渡邊小華による畫が其々描かれている。そして、そこに登場する花を確認すると、屢々中國趣味の文人に好まれる牡丹、梅などと並んで、茉莉花の名が見えるのである。

その「茉莉花」題詩は、岡本黃石の別集『黃石齋第三集』卷上「汎游集」に、「名花十二客 錄六 茉莉」という詩題で所收されている。以下に引用すると、

1 淺暮發深香、2 仙姿澹無語。3 弄妍初月涼、4 消盡人間暑。

淺暮に深香を發し、仙姿淡くして語無し。妍を弄びて初月涼しく、消し盡す人間の暑を。

となつている。この詩は、茉莉花を美人に擬している妖艶な五言絶句である。また、明・都印撰『三餘贅筆』中「十友十二客」を参照すると、「宋張敏叔以十二花爲十二客各詩一章牡丹貴客（中略）茉莉遠客…。（宋の張敏叔、十二花を以て十二客と爲し、各詩一章、牡丹は貴客、（中

略）茉莉は遠客…。」とあり、即ち、名花十二客とは宋の張敏叔が十二の名花を十二種の客にたとえたものであり、茉莉は「遠客」と稱されていたことが分かる。更に、『畫題辭典』の項目「めいくわじふにかく（名花十二客）」を参照すると、名花十二客は「名花十友などと共に文人畫の畫題」として度々描かれていたと記されている。茉莉園詩派の一員とは言えないが、かの梁川星巖の高弟であり、また森春濤と精力的に交流していた岡本黃石が茉莉の花に題して詩畫を創作したことから、文人コミュニティというミニチュアな空間に限定されるとはいえず、「茉莉花」を題詠する意識が茉莉園詩派の周邊領域にまで浸透していたことが伺えるだろう。

なお、永井荷風『下谷叢話』によると、「花卉帖」を描いた渡邊小華は森槐南の師である鷺津毅堂が書畫の品評をなした「半閑社」の五名の會員（福島柳圃、渡邊小華、奥原晴湖、安田老山、鷺津毅堂）の一角を成していたようである。「半閑社」は、鷺津毅堂筆の雅約を参照すると毎月一度煎茶會を開き、また茶を嗜みつつ、古人の書畫を展べて鑑賞し、自らも筆を染めて詩書畫を成すという、極めて典型的な近世文人サークルであつた。このことと、渡邊小華が明清の畫風も取り入れていた事實を掛け合わせて考えると、やはり茉莉花に對する趣好の背景に先述した明清由來の文人文化が横陳しており、未だ容易には渡航できない大陸に對する夢想的憧憬が、彼らの間で共有されていたのかもしれない。中國文化に飢えていた彼らにとって、大陸から舶來した茉莉花は、十分に賞玩に値するものであつたのだろう。

（三）考察③―明代庭園理論に着目して―

ところで、『東京市史稿』『遊園篇』（東京都編纂）など、江戸から明

治の東京の庭園及び流行した花卉類に關する文獻を涉獵してみると、茉莉花の名前は見當たらず、茉莉花が庶民の間に流行していたという記録は殆ど見當たらぬ。更に、東京市役所市史編纂係編『東京案内』⁽³⁵⁾下巻に「下谷ノ牽牛花」という項が設けられていることから、下谷の地のみにフォーカスすると、江戸時代より「牽牛花」が街の代名詞となる程に流行していたことが分かる。

即ち、茉莉花は茉莉巷凹處や煎茶席のような、極めて閉鎖的な空間においてのみその芳香を放っていたのである。このことを念頭に置いた上で再考すると、士大夫が憩う仙窟としての「茉莉巷凹處」は、近代都市へと段階的に變貌した東京において、どのように位置付けられるのだろうか。このテーマと同じく、「都市の發展とそれに伴う庭園の意義變容」が先行研究の主要なテーマとされてきた明代庭園に關する諸理論を參考にした上で、新しいモデルを提示したい。

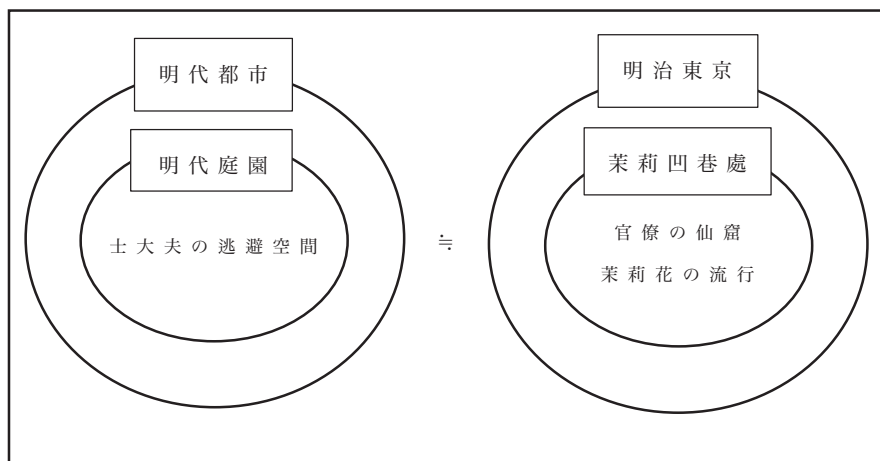
明代に書かれた造園法の理論書として、もつとも高名であり、また世界的に汎く讀まれたものとして計成の『園治』⁽³⁶⁾（一六三二年刊行）がある。張渭濤「園治」の日本への傳播とその影響によると、日本には元祿十四年（一七〇一年）以降に長崎經由で渡來し、「江戸時代から特に近代日本の造園學、美學、美術學、文學など多くの學術分野に様々な影響を與えた」ようである。

では、『園治』における造園論の實際は、どのようなものであったのだろうか。田中淡『園治』の世界―明末の造園論⁽³⁷⁾にはそのダイジェストが紹介されているが、基本的に計成は「市井は園するべからず」というスタンスを取りつつも、「もしこの地に庭園をつくる場合は、必ず靜寂で隔絶した地を選んでおくべきである。隣は俗世間に近いとはいっても、門を閉ざせば喧騒を覆い塞ぐことができる。（中略）

繁華な場所に幽靜を求めることができるのなら、どうして近くを捨てて、遠くに行こうとする必要があらうか」と、論を展開している。この姿勢に對して、田中淡は「苦し紛れのように聞えなくもないけれども、實際のところは、むしろ都市の庭園を想定しなければならぬ状況がおおかつたからであらう。」と、記述の背景に明代都市の發展と、そこに居を構えなければならなかった士大夫の存在があることを推測している。

明代都市庭園の實態とその背景について、更に詳しく見てみよう。クレイグ・クルナス『明代中國の庭園文化 みのりの場所／場所のみのり』⁽³⁸⁾「Ⅱ 美學の庭園」を參照すると、當時の士大夫階級や富裕な地主階級においては、「經濟的な園藝」と「美學的な園藝」との分裂が始まっていたようである。即ち、世界經濟に銀が導入されたことによつて經濟が發展し、新興層の抬頭によつて既得權益が脅かされていた彼らは、街中に溢れていた果樹園―そこには、葱や薤のような經濟的に價値のある草木が植えられていた―と自らの住居空間を隔絶するために、自邸に珍奇な花木を植栽することで、庭園を「現實的なものから非日常のかつ人工的なものへと移行」させ、權威付けたのである。また、彼らは大量消費社會に疲弊していたことにより、隱遁への願望を抱きつつも、便利な都市から住居を移すこと自體は避けたいという意識を同時に有していた。そこで、都市の中に「市隱」できるミニチュア空間を構築することで、自らを都市の喧騒から隔離していたのである。

ここまで明代庭園の實態について言及してきたが、同様の構造を、江戸から東京への遷移過程においても見出せるだろう。白幡洋三郎「都市と庭園 近世・近代の連續」⁽³⁹⁾は、江戸時代における江戸の町を



(圖三：明代庭園と茉莉凹巷處の類似モデル)

三

「大小の庭園が、一つ一つ圍われ、幾重にも入籠のように存在している庭園都市」と捉え、明治時代に突入してからは政府がその入籠構造の園を「公園」や「道路」の設置を通して強制的に解體し、近代都市東京に開いていったと、解説している。政府がその權力を以てして庭園都市を解體した、という現象は明の都市事情とは異なる点だが、都市の急速な発展に伴い、それまで渾然一體と連動していた都市と自邸が分離し、自邸の外が「憩えない空間」に變貌してしまったという顛末においては、類似構造が見出せる。

江戸の町は、時代が

明治に突入したことで、次第に近代都市化していった。ただ、近代都市化を推奨した明治政府の官僚集團も、青年期もしくは壯年期までは江戸の町に生きており、普段の公的な仕事においては近代に生きる他なかつたが、そこには恐らく疲弊も生じていた。彼らには、茉莉凹巷處のように、一時的に休息できる空間——換言すれば、社會的・政治的立場に關係なく、誰もが平等に参加できる、開かれたアジュールが必要だったのである。そしてその空間をより幻想的なものにするために、江戸時代と同様に中國を想起させるアイテムを取り入れ、愛好したのかもしれない。即ち、中國的なものを取り入れるという營爲そのものが、江戸の文人文化を内面化している彼らに安心感を抱かせたのであり、茉莉花やそれに題した艶詩^①も、アレゴリーというよりは寧ろ、裝飾や演出として機能していたのだろう。この場合における茉莉花は、桃源郷における桃の花のような役割を果たしていたのである。

以上の議論から、當時の明清文化の産物や理論書から文人が吸収したものには、單純に文物、調度品に對する愛好の精神のみならず、都市空間において隱逸することのできる、ミニチュア空間としての意識も含有されていたのではないだろうか。そして、茉莉凹巷處内における茉莉花の存在も、そのようなミニチュア空間を演出するための、一つの文化裝置であつたと定義づけることが出来るかもしれない。茉莉花の香が充滿する庭園で、文人官僚たちは一時的な現實逃避の愉悅に浸りつつ、「茉莉花」詩を詠んだのだろう。

おわりに

森槐南に、「竹篋幽居小集分得垣字（竹篋幽居にて小集し、分けて垣の字を得たる。）」（『槐南集』卷十三に所収）という七言律詩がある。その尾

聯のみ掲げよう。

7 危蘭倚盡依戀、8 宛似當年茉莉園。

危蘭に倚り盡くして依戀を添へ、宛も似たり當年の茉莉園。

「危蘭」は高所にある手すり、「依戀」は慕わしく思う気持ちを指す。この詩題にある「竹磴」とは森槐南の弟子森川竹磴を指し、彼が詞作活動を行っていた時代には、既に往年の茉莉巷凹處は引き拂われていた。森槐南は、自身及び父春濤の詩活動の據点であった茉莉巷凹處自體を、往時の榮光の象徴として捉え、そのひとときの復活を森川竹磴の幽居に見たのである。

そして、茉莉園詩派の詩人群像の存在は、時が経過し、世間からは彼らの存在がすっかり忘却されてしまうにつれて、益々「往時を懷古する」哀愁を伴って描寫されるようになった。特に大正期の「支那趣味」に耽溺した小説家の作品中には、本稿で觸れた永井荷風については言を俟たないとして、芥川龍之介や谷崎潤一郎の隨筆・小説にも森槐南や、永坂石埭の名が見える。茉莉園詩派の詩人が明清文化の産物に魅了され、未だ見ぬ大陸、中國文化への憧憬を抱いていたことは既に述べたが、觀方を變えれば、大正期における「支那趣味」は、この原初的な憧憬を昇華したものと解釋することも可能だろう。

入谷仙介は、『近代文學としての明治漢詩』において「表現者の極北」という章を設け、森槐南の高度に洗練された藝術作品としての漢詩を稱え、同時に、その限界を指摘した。たしかに、日本における漢詩文學という領域においては、森槐南の挑戦が最高到達点であり、その後は北原白秋ら、別の詩體を驅使する近代人に「文學」の表舞臺を譲らざるを得なかったことは事實だろう。ただ、先述した「支那趣味」の例などを参照すれば、無意識的であるとはいえ、彼らはエポッ

茉莉園詩派における茉莉花と「茉莉花」詩について

クメイキングな役割を擔つていたと言えるかもしれないのである。

注

- (1) 揖斐高「明治漢詩の出發」(揖斐高『近世文學の境界…個我と表現の受容』(岩波書店、二〇〇九年)に收録)に詳しい。
- (2) 『鵬外全集…森林太郎著作集』第四卷(鵬外全集刊行會、一九二九年)所収。
- (3) 槐南即ち森槐南は森春濤の息子。また、夢香即ち上夢香は春濤一派の一員であり、艶詩を善くした。
- (4) 日野俊彦『森春濤の基礎的研究』(汲古書院、二〇一三年)「第七章 春濤と艶詩をめぐって」「二『詩魔自詠』引について」を参照。
- (5) 森春濤の艶詩が近代世界に與えた影響について考察した先行研究としては、代表的なものとしては入谷仙介『近代文學としての明治漢詩』(研文出版、一九八九年)や齋藤希史『漢文脈と近代日本』(角川ソフィア文庫、二〇一四年)などが挙げられるだろう。
- (6) ここでは、例えば谷崎潤一郎の『刺青』や、與謝野鐵幹・與謝野晶子の『明星』などの文學作品・文學集團を指す。
- (7) 例えば、前掲注(5)入谷著において論じた森春濤の「憂愁」を、その一つの回答として示すことは可能であるかもしれない。
- (8) 本稿における詩句のナンバリングは、その詩の最初の句から数えている。
- (9) ここにおける「詩派」は、「詩家の派別。」(『大漢和辭典』)の意というより、今日の觀點から見れば森春濤・森槐南を中心とした交友圈、ネットワークの意と捉えた方が良いだろう。
- (10) 本稿では以後、「森春濤とその子息の森槐南が形成した詩派」を指すテクニカル・タームとして、この「茉莉園詩派」を用いる。

- (11) 『前田愛著作集』第一卷「幕末・維新期の文學 成島柳北」(筑摩書房、一九八九年) 所收。引用部分は、該書の一九一〜一九三頁に基づく。
- (12) 久保田金僊編『下谷上野』(松坂屋、一九二九年) 所收。引用部分は、該書の一〜二八頁に基づく。
- (13) 森春濤詩抄刊行會、一九八〇年。引用部分は、該書の四頁に基づく。
- (14) 東京大學史料編纂所藏、一八八一年。
- (15) さねとうけいしゅう編譯『大河内文書 明治日中文化人の交流』(平凡社、一九六四年)、九六頁より引用。この場面では、森春濤が清國の人に、茉莉巷凹處の名づけの由來について説明している。
- (16) 「茉莉祠」は、摩利支天德大寺を指す。この律詩に森春濤は、「茉莉原名奈花(茉莉の原名は奈花)」と注している。
- (17) 「茉莉祠下作」に、以下のような題註がある。「茉莉夫人爲波斯匿王次妃即諸天中摩利支天所稱鬼子母事見璽珞經及法苑珠林又見舒鐵雲詩序及張三丰集(茉莉夫人は波斯匿王の次妃たり、即ち諸天の中摩利支天の鬼子母と稱する所、事は璽珞經及び法苑珠林に見え、又た舒鐵雲の詩序及び張三丰集に見ゆ)。「舒鐵雲の詩序」とは、舒鐵雲の別集『瓶水齋詩集』卷七に「茉莉夫人鬼磨詞」という七言律詩が見え、その詩序のことを指している。
- (18) 「芭蕉」と「茉莉」が一聯の中に登場する日本漢詩の先例として、江戸中期・六如の「病中值立秋(病中立秋に値ふ)」「六如庵詩鈔」卷三に所收)という七言律詩の領聯に「芭蕉葉戰瀟瀟雨、茉莉花香細細風。(芭蕉の葉は戦々瀟々たる雨に、茉莉の花は香る細々たる風に。)」とある。他にも、江戸後期・頼山陽に「贈元瑞以茉莉(元瑞に贈るに茉莉を以てす)」「(山陽詩鈔」卷六・六丁に所收)という七言絶句があり、また、明治初期には星野履「茉莉花」(大沼枕山編『下谷吟社詩』上に所收)という七言絶句がある。これらの用例から、森春濤以前から茉莉花
- は既に、屢々詩の題材とされていたことが分かる。しかしながら、それまでの茉莉花はあくまで詩材であり、詩社のシンボルとして、連続性と共同體性をもたせたことは、これ以前にはなかった。
- (19) 「雪玲瓏」は、茉莉花の花びらの色が雪のようである、という意味である。「茉莉花」詩においてはよく見られる表現であり、この表現は茉莉花の「涼やかさ」を強調していると取れるかもしれない。
- (20) 「ホトトギス」第二卷第十一號(一八九九年) 所收。
- (21) 該當部分の原文は、「1原是胡地產、2後向南海移。31木犀未開候、12石榴初謝時。13纖纖美人手、14摘將穿綵絲。19又聞閩山裏、20蒿菜人視之。…」である。
- (22) 『花月新誌』第十五號(花月社、一八七七年)の六〇七頁に記載。
- (23) 「茉莉國詩派の有する政治性」というテーマに関連して、合山林太郎『幕末・明治期の日本漢詩文の研究』は、仲間うちで次韻を大量に繰り返し、外國人相手にもそれを要求する森槐南とその周邊詩人たちの行爲は、彼ら特有の慣習として世間から認識されており、批判されていたことを指摘している。また野山嘉正『日本近代文學の詩と散文―明治の視角から―』(明治書院、二〇一二年)は小野湖山と成島柳北を比較し、當時小野湖山・森春濤の周邊において次韻が盛んに行われたことには、自らが新政府の眷顧を得ていたことの喜びも込められていたのではないかと推測している。
- (24) 『國語國文』第七十五號、二〇〇六年。八頁の引用部分は、當該論文の十三頁に基づく。
- (25) 『趣味の友』(一九一七年九月一日) 所收。
- (26) 「花月會席上分韻得歌賦此送坪井咬菜(孝) 游越後 其二」の現代語譯は次のようになる。「森春濤翁が越後の地を去ってから、いつたい何年経ったのだろうか。七十二の橋には、若々しい柳が多く生えているのだろ

う。一方私はもう既に白髪であり、酒器の前で昔話をできる人はもう殆どいない。氣が減入っているが、森春濤翁が作り、一世を風靡した竹枝の歌は今なお残っている。」また、永井禾原はこの詩に「春濤翁遺著有新瀉竹枝（春濤翁の遺著に新瀉竹枝有り）」と自註をつけている。

- (27) この詩の結句は、森春濤が詩壇において最も活發に活動していた一八八一年に上梓した「新瀉竹枝」が、かつて大いに持て囃されたことを踏まえている。

- (28) アートライフ社、二〇一九年。

- (29) なお、永井禾原の中國趣味の萌芽は、彼が一八九七年に退官して上海に渡航する以前より、既に芽生えていたものと考えられる。『來青閣集』卷一には一八六七年〜一八九六年の作品が收録されているが、そこからは森槐南や永坂石埭、そして來日していた王奎園ら清末の文人と交流した形跡が既に見られ、また「秋日書感次吳梅村（偉業）壁幅詩韻（秋日書感。吳梅村（偉業）の壁幅詩韻に次す。）」という七言律詩が見られることから、中國由來の文物を愛好する精神は、渡航前に既に醸成されていたと思われる。そして、永井禾原の中國趣味は、明清の書籍から空想上の中國を思い描くことに留まっていた江戸期の中國趣味の延長線上にあるものの、實際に上海に赴き、現地の文人と交流できたことは、彼にアジュールとしての中國を再認識させ、日本の文人コミュニティにおいて培われた中國への憧憬をより促進させたという意味で、江戸期とは異なる、明治期特有の性質を有していた、と言えるのではないだろうか。

- (30) 便利堂、一九六五年。

- (31) 淡交社、二〇〇六年。十頁の引用部分は、該書の七六頁に基づく。

- (32) 『和漢比較文學』第六十三號、二〇一九年。

- (33) 國書刊行會、一九七七年。

- (34) 岩波書店、二〇〇〇年。引用部分は、該書の二四三頁に基づく。

茉莉園詩派における茉莉花と「茉莉花」詩について

- (35) 裳華房、一九〇七年。

- (36) 『共愛學園前橋國際大學論集』第二十號、二〇二〇年。引用部分は、當該論文の三九頁に基づく。

- (37) 『月刊しにか』（一九九四年二月號）所收。

- (38) 「市井」は都市を指す。また引用部分は、當該論文の三三頁に基づく。

- (39) 青土社、二〇〇八年。以下の記述は、本書の八六〜一二〇頁に基づく。

- (40) 大塚信一『都市文化』（岩波書店、一九九九年）所收。以下の記述は、本書の五六、五七頁に基づく。

- (41) 森春濤・森槐南とその周邊人物にとって艶詩、艶的な詩語、そして詩における艶的ニュアンスとは如何なるものであったのかという問題に關して、例えば森槐南の「夢說」（『新文詩』第五十集に所收）には、夢の中では海棠の近くで美人と戯れることができるが、現實世界ではあばら屋で過ごすしかないことを嘆いている一節があり、ここから、夢想の世界に遊ぶための手掛かりとして、艶的なモチーフを捉えていた可能性が考えられるかもしれない。茉莉花の存在や、中國趣味も、そのような艶やかな夢想の世界を演出するための、一つの手掛かりだったのだろう。

- (42) 谷崎潤一郎の『鶴唳』（『中央公論』（一九二二年七月））という支那趣味小説には「槐南」の名が見え、また芥川龍之介の『松江印象記』（『松陽新報』（松陽新報社、一九一五年））には、永坂石埭が詠じた明麗なる宍道湖の風光が既に失われてしまったことを嘆く描寫がある。このように、「支那趣味」に耽溺した大正期の文人にも、茉莉園詩派の詩人の存在は依然として強く意識されていたのである。